山陰地方地理学巡検　（式　先生）

１９７１年９月６日～９月９日

９月６日　三方五湖

９月７日　宮津→網野→鳥取

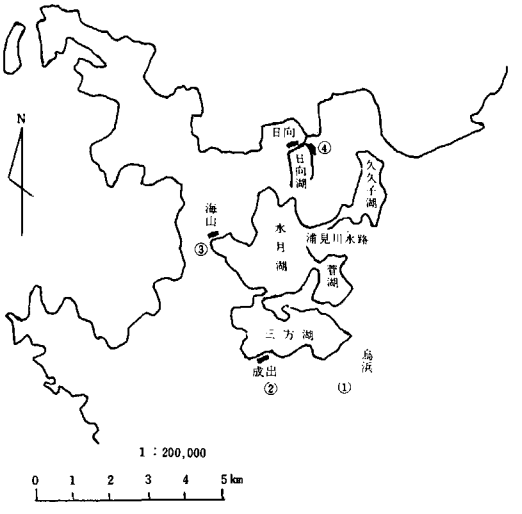
９月８日　鳥取砂丘→安来

９月９日　弓ケ浜

夏休みも終わりに近づいた９月６日から４日間，式先生に引率され，三方町を起点に，山陰路を下って境港市までの地域を観察した。広域調査なので，個々の地域調査が薄いものになるのでは，と懸念していたのだが，先生の御友人の豊島先生（鳥取大学）・池田先生（島根大学）が案内して下さったので，とても充実した巡検だったと思う。

研究のテーマは，山陰地方の地域性を見ることであり，地誌的な角度から観察した。

第１日目。先輩にあたる多田（旧姓宇野）さんの案内により，マイクロバスで，三方五湖を巡った。ケルン＝コル・ケルン＝バット・三角末端面が顕著で，地形学の復習になった。車外で観察したのは，図中の４部落にすぎないが，この地に於いて最も画期的な出来事は，１６００年代の久々子湖・水月湖間の浦見川の開さく工事であるという事がわかった。これによって水害も防げ，生倉・成出の両部落が成立したのであるから。又，村落景観は，村の機能・村の地理的位置と密接な関連を持つことを感じた。　宮津泊



	機　能	景　　観
鳥浜部落	主農従漁村	水田と，三方湖に通ずる水路と小舟がめだった。
成出 〃	純　農　村	水田，家畜小屋，梅の木がめだつ。（湖の漁業権は全く持っていないが

機　能	景　観
	湖の近くに多くの水田を所有している）
海山部落　主農従漁村	水田がめだったが，永月湖の利用法として生州を作り観光事業に力を入れはじめている。
日向　〃　純　漁　村	列村形態をとり，海岸線に沿って家屋が密集している。

第二日目。皆の希望で，朝早くから船で天の橋立に行った。観光客の多さに，私の描いていたイメージはこわされてしまったのだが，このような砂州を作る自然の営みの偉大さに目をみはらされた。それから汽車に一時間ほど乗って網野町に行った。ここでは市役所の方の案内で昭和二年の奥丹後地震による地震断層を見学した。そのあと副業として織物を作っている農家と丹後ちりめんの加工場を見学した。加工された反物は，染色のために京都に送られ，丹後ちりめんとして売り出されるそうである。今年はドルショックのために操短しているらしいが，山積みされたちりめんを見て感じたことは，日本人の消費力のすごさである。この夜は旅館に，先輩にあたる寺西（旧姓長松）さんが訪れて下さった。鳥取泊。

第三日目。豊島先生の案内で鳥取砂丘（特に浜坂砂丘）及び，鳥取大学の砂丘研究所を訪れた。あのような大規模な砂丘を発達させた条件は，「砂の材料である花崗岩が豊富なこと。冬季に北西風が卓越すること。砂丘の堆積と成長を容易にする相当の起伏をもった基盤岩の山や丘陵が存在すること。」であり，一年の平均堆積量は3～4センチメートルと言われている。すりばちといわれる大きな凹地や小山のような砂丘列が特徴であり，農地化されているところではらっきょうが栽培されていた。砂丘研究所では「砂地はくせがないために手入さえすれば特殊な作物（タバコなど）の栽培に適する。」とうかがい，そのあと訪れた鳥取県庁では県の総合開発計画を聞き，後進地域といわれる山陰を変革してゆこうとする意気込みを感じた。その後，安来市の和鋼記念館を見学し，「たたら」の歴史を伺った。この夜は山陰の代表的な温泉地である皆生温泉に泊った。

第4日目。鳥取大学の池田先生の案内で弓ケ浜の開発（干拓）のあとをたどった。そして特に近年の動向を象徴している鉄工団地や木工団地及び，境港と島根半島を結ぶ架橋工事を見ながら，マクロにこの地域の地理的位置や港の機能を考察した。そして昼すぎに解散となった。

汽車の便の悪さ，車窓からの夜景は，東海道メガロポリスの延長線上に位置する山陽に対する後進地域山陰というイメージ付けを十分に保障するものではあるが，しかし，古い歴史と静かなたたずまいを残す山陰の町や自然は日本人の郷愁をそそる要素を多くもっていると，深く感じた。

（3年　宇　賀　敏　江）